企画公演 香と能 ―その一―

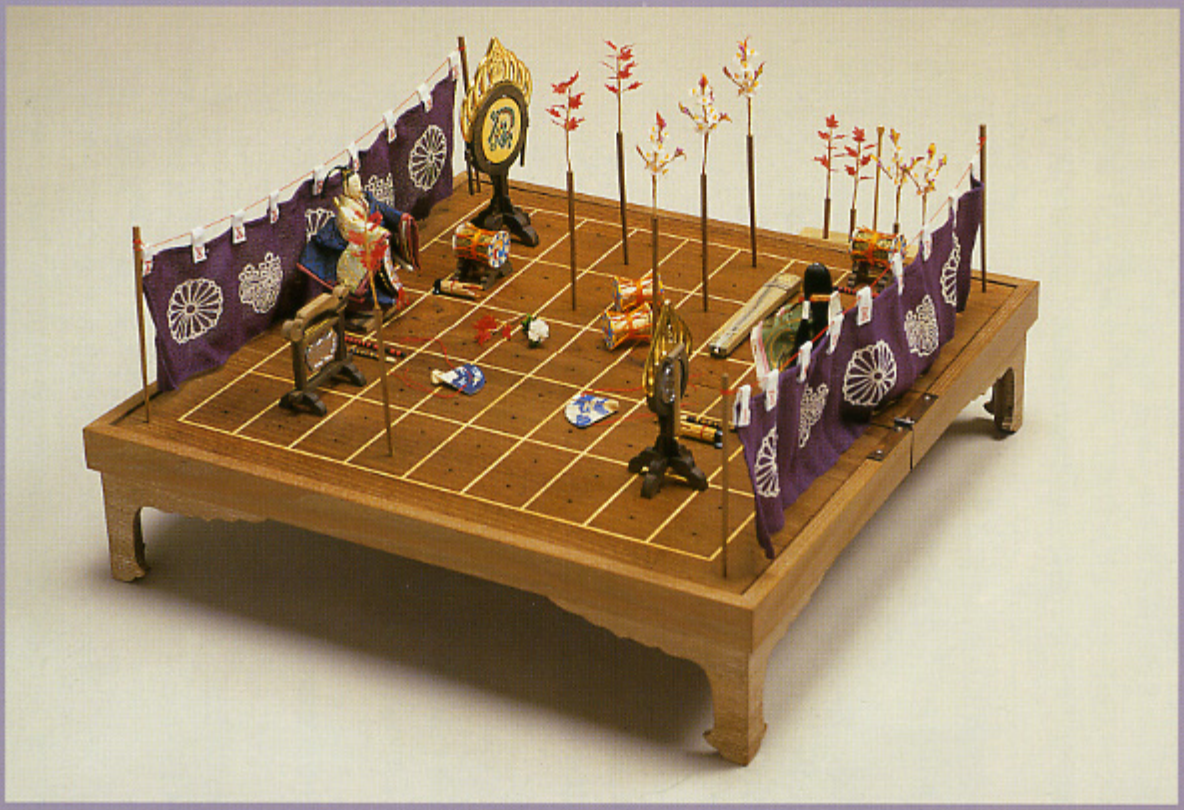
◆平成十四年八月二十二日《木》午後六時半開演

聞香

―もんこう―

資料

国立能楽堂



源氏舞楽香盤及立物

志野流香道―伝え続ける『道』の心

■志野流香道第二十代家元　蜂谷幽光斎宗玄

二十代に亘る当流の歴史を遡ると、志野宗信に辿り着く。京都四条に居を構え、松隠軒と号した。ようやく応仁の乱が鎮まった世情不安の中、芸術をこよなく愛した足利八代将軍義政公を支えた同朋衆の一人であった。

宗信と交遊の深かった人々の中に牡丹花肖柏、村田珠光、宗祇法師、帰牧庵玄清、相阿弥、咲山軒大喝、二階堂行二等がいる。何れも文人・連歌師あるいは茶人として知られる文化人・識者であった。

義政公の命により、宗信は将軍家所持の名香百八十種を分類すると共に、三條西実隆公所持の六十六種をさらに精選し、追加・入れ替えなどをして「六十一種名香」を定めた。それらの過程を経て、「六国五味」の概念が究められたのである。

宗信が遺した業績の中で、この「六国五味」の確立は、ひときわ重要な意義を持っている。すなわち、香を炷く作法の制定もさることながら、使用する香木の分類が明確になされるに至って、はじめて世界に類のない嗅覚の芸術は「香道」として成立したと言えるのである。

宗信の精神は「香道心持之事」に始まり「秘伝」に至る『志野宗信筆記』（文亀元年＝一五〇一年）八十八箇条に記され、歴代の高弟達に伝授され、連綿と受け継がれている。

初代より五〇〇年の歳月を経た今もなお、変わらずに伝え続けようとするもの。それは決して、試験問題の模範解答ではない。「道」を志し、歩む者が抱く疑問に対して、答えを与えるものではないと心得ている。

「香道」とは一体何か。

それは、わずか三～五ミリ角、厚さ約一ミリのごく小さな香木片を、炭団を入れた香炉で適温に加熱し、その香気を味わうことから始まる。決して強い香りではない。しかし、か弱くもない。むしろ仄かな中に、深い奥行きと豊潤さを備えている。

香木の香りを「嗅ぐ」とは言わず「聞く」と表現するのは、その小さなかけらの中に在る広大無辺な宇宙を逍遥したいという心の表れである。言い換えるならば、「聞く」とは、「問うて答えを待つ」という心の在り様である。

ただ無心に香木の香りを楽しむことに始まり、「香を聞く」ことの答えを各人各様に悟るに至る終わり無き道、それが「香道」だと言えるのかも知れない。

当流は「型」を重んじ、手前作法が厳格であると知られているようである。確かに、席入りの瞬間から足の運びは定められ、道具を置く位置も畳の縁から何目とまで細かく決められている。それも全国津々浦々の教場において、押し並べてである。

「型」を重んずるのは「型」にはめ込みたいからでは無い。「型」を守ることによって、はじめて見えて来る境地が在るからである。

「能」の真髄が何処に在るのか知る由もないし、語る立場にも無いのであるが、ただ、「型に入りて型を出る」という境地において、少なからず相通ずるものを感じている。「幽玄」

の理念を展開することにおいても同様である。

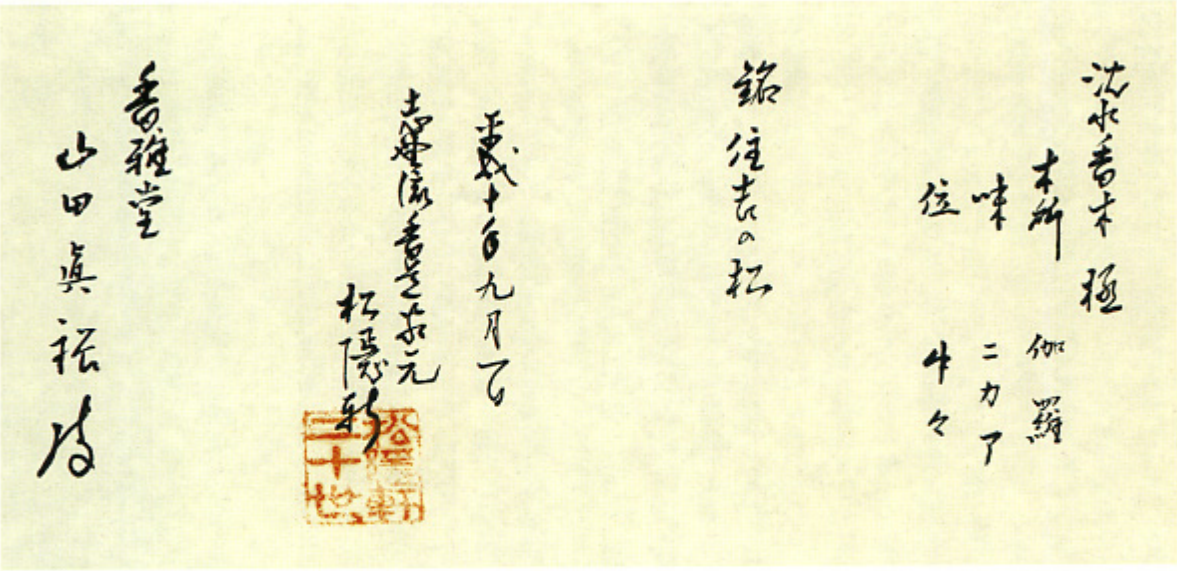
今般、国立能楽堂のご尽力によって「香と能」の企画公演が実現したことは、大変意義あることと受け止めている。同じく中世に「道」として確立された茶・花・能・香のうち、一見して最も関わりが無いように思われている「能」と「香」とが、実は本質的なところで幾多の共通性を有していることを改めて考えさせてくれる、絶好の機会になると期待されるからである。

日本の精神文化を代表する伝統芸道が、お互いの共通点・相違点を再認識することによって、より一層の交流を図ることが、私達日本人の中に綿々と継承され続けて来た「心」を、更に後世に伝え続ける力になるものと念じている。

香木 六国のうち真南蛮

■志野流歴代家元一覧

	姓名	生年・没年（西暦）	雅号	「志野流香道系図及沿革」記載事項
初代	志野 宗信	（一四四三～一五三三）	松隠軒	東山義政公御師範
二代	志野 宗温	（一四七七～一五五七）	参雨斎	宗信嫡子
三代	志野 宗巴	（　～一五七一？）	不案斎	宗温次子
四代	蜂谷 宗悟	（　～一五八四）	休斎	教賀侍従一子
五代	蜂谷 宗因	（　～一六〇七）	一任斎	宗悟嫡子
六代	蜂谷 宗富	（　～一六六〇）	桂山	宗因一子
七代	蜂谷 宗清	（　～一六八八）		宗因次子
八代	蜂谷 宗栄	（　～一七一八）	蘭山	宗清一子
九代	蜂谷 宗先	（一六九三～一七三九）	篠光斎	宗栄嫡子
十代	蜂谷 勝次郎	（一七二一～一七四八）		宗先嫡子早世
十一代	蜂谷 勝次郎豊光	（一七二七～一七六四）		宗先次男
十二代	蜂谷 式部	（　～　）		養子 岡本伯耆守一子不縁ニナル
十三代	蜂谷 武部豊充	（　～一八一二）		養子 岡本安房守一子不縁ニナル
十四代	蜂谷 多仲貞重	（一七五九～一八二六）	常足庵	岡本伊豫介第子実ハ藤野春淳弟
十五代	蜂谷 宗意	（一八〇三～一八八一）	信好斎 閑斎	自重実子
十六代	蜂谷 宗敬	（一八三七～一九九〇）	好古斎 十常斎	貞晴次男
十七代	蜂谷 百枝	（一八三四～一九〇七）	桂春庵	自晴長女
十八代	蜂谷 宗致	（一八七四～一九三一）	頑魯庵	養子 釈丁吉長子
十九代	蜂谷 宗由	（一九〇二～一九九八）	幽求斎	頑魯庵長子
二十代	蜂谷 宗玄	（一九三九～　）	幽光斎	貞清長子


沈水香木極
本所
味
位
伽羅
ニカア
牛々
銘住吉の松
平成十年九月吉
志野流香道家元
松隠軒
香雅堂
山田真祐

極（きわめ）

志野流伝来形忍草蒔絵十種香箱皆具

能のかおり

■麻布　香雅堂　主人　山田　眞裕

もう一昔も前のことである。香道にも造詣が深い国立能楽堂の制作担当者から、小冊子を頂戴した。

内容は、六歳から能楽を学び一芸を究めた白洲正子女史が一九七四年に著した『お能』から『お香とお能』の章を写したものであった。氏の脳裏には、この小冊子がいつの日か「香」と「能」との協演に繋がるであろうとの予感があったに違いない。

二〇〇〇年三月三日、瀬戸内寂聴作『夢浮橋』の初演に先立ち「源氏物語の香り」について尾崎左永子女史と共に公開講座を担当させていただいた時、その予感が協演の実現へ向けた強い意志となっていたことを悟ったのであった。

なぜ、「香と能」なのか。今回の企画公演が決して新機軸を出す為や、意表を突く為のものでは無いことを解説できることは、望外の喜びである。（以後、「　」内の言葉は全て『お香とお能』からの引用である）

「香道は茶道と切っても切れぬつながりがあることは、いまさらいうもおろかです。そしてお能とは一見赤の他人のような顔をしながらも姉妹のようなもので、いたるところに共通点が見出せます。」

「香道は根本において香木と火とそれから人間の三つで成立するのでありますから、ひじょうに単純であるために完全をはかりやすいのです」

「じつはお能も香道と同じほど単純なのです。そして同じく三つのものしか必要としていません。お能におけるシテは香木であります。シテ以外の部分は火であります。

お能のシテが、シテを助ける背後のものとピタリ一致するときに、お能のかおりができあがるのです。その息もつけぬ微妙な瞬間は、芸術の歴史的一場面であります」

「かおりが直接体験であるように、お能もまた身にふれることができます。お能がかもしだすふんいきは、香のかおりのそれと似ているどころか同じものなのです。」

「あまたの香木はひとつひとつの違うかおりを内にもつことによってお能の演者にひとしいものです。」

「見物は好ましい一つのかおりを聞くためにお能をみるのです。そしてお能は妙なるかおりを発散して見物に答えます。同時に見物にも問いかけます。『この「羽衣」のかおりはお気に召しますか？』と。」

白洲正子女史にとって大切なものは「かおり」、それも「鼻でかぐことのできないかおり」であった。

お能が演じられる瞬間に、そして香木の小片が銀葉の上で炷き出される瞬間に解き放たれる「かおり」を十分に深く味わうために、いったい何が必要とされるのであろうか。

唯一必要なのは知識でも経験でもなく、ただ無心に聞くことである。聞くと言うことは、相手と一体となるべく心を開き、自らの感性を研ぎ澄ますことに他ならない。無心に聞くことによってのみ「かおり」を知ることができる。大海に浮かんで水を知るように。大空を漂って風を知るように。

無色透明の「かおり」と一体となるとき、自らの存在もまた空と化す。空と化したものに、もはや顔も、手も、足も無い。もち

ろん鼻も無いのである。

香を聞くことの神髄と、能を観ることの神髄とが実は同じものであること。それこそが女史が伝えた主旨であり、この企画公演の主題でもあると解している。

今回、皆様に炷き出させて戴く香木として、志野流香道当代御家元より『極』(別掲写真参照)を頂戴した銘香二種を選んだ。

香道に用いられる香木は、六国五味の分類の基準を満たすものに限られる。その基準は、流派を司る家元の掌中に在る。絶対的な、或いは客観的な基準など存在しない。室町時代から連綿と継承された伝統に基づく家元の判定だけが、絶対なのである。極論すれば、家元の基準に該当しない香木は、香木では無い。それ程に『極』の持つ意義は重いのである。

これら二種の香木は、いずれも伽羅である。折角の機会に、敢えて同じ分類の香木を選んだ理由は、伽羅にもさまざまな個性があること、それらの違いが極めて微妙なものであることを、先ず理解していただきたいと考えたからである。

いま少し引用しておく。

「お能の名人は名香のように、妙なるかおりをもつ人々であります。そして伽羅であるべきお能にはいつでも自分のなかから伽羅のかおりを発散させることができるのです。いろいろのかおりをたくわえている『香のもと』にもひとしい人です。それゆえに二百数十番のお能のかおりに変化することができます。世阿弥がいった『まことの花』の意味はここにも読みとれます。」

先ほど触れた主題が果たして机上の空論であるのかどうか、第一部・第二部を通じて、各人なりに聞きくらべていただければ幸いである。

楽間香炉
十八世頂魯庵宗致が自らの好みで焼かせたもの。